

藤枝市史だより

第10号

平成16年2月20日発行
編集・発行 藤枝市郷土博物館
市史編さん係
〒426-0014
藤枝市若王子500 (蓮華寺池公園内)
TEL 054(645)1100

E-mail
fujieda-muse@ny.tokai.or.jp

染によって変化しない光り輝くくちなしの黄は、「黄金色」王者の色であろうか(「色と糸

と織と」と表現しています。

瀬戸の染飯は、天文二十二年(一五五三) 備前国(岡山県)の法華門徒らが祖師日蓮ゆかりの武蔵国池上本門寺(東京都大田区)などを参詣した折の紀行文「参詣道中日記」に、「せとのそめい、」として初めて見えます。続いて天正十年(一五八二)、甲斐の武田勝頼を滅ぼした織田信長は、甲府から富士大宮を経て東海道を西へ安土城に帰る途中、瀬戸川を渡りましたが、「信長公記」にはこの地で染飯が人に広く知られる名物として売られていたことが記されています。さらに天正十八年三月、小田原北条氏の征討に向かう豊臣秀吉に随行した久我敦通は、瀬戸の染飯を食べたことを『東国紀行』に書きのこしています。

に、食べるほどのものではないが、美しくて昔恋しい心地がし、古い代の旅糧の名残かとみえています。猿猴庵「東街便覧図略」(天明六年(一七八六))には、「せとめいふつ」と書かれた袋と四角い染飯の図が描かれ、一袋十二文ずつと書かれています。しかし、桑原藤泰「駿河記」(文化六年(一八〇九))には三角と書かれていますから、時期によって変化があったのかもしれない。阿部正信「駿国雑志」(天保十四年(一八四三))には、糯で作った湯櫃形の大ききでかき餅ほどのものを、四角にして焼いて食べる、岩おこしの類という里人の話が収められています。

文化二年(一八〇五) 正月二十五日のこと。幕臣の遠山景晋(江戸町奉行「遠山の金さん」として知られる景元の父)は、前年九月にレザノフを大使とするロシア艦隊が長崎に来て通商要求をしたため、応接使として幕府から派遣される途中、「瀬戸川村」(ママ)を通り、名物染飯について、「強飯を山梔子にて摺つぶし干し乾したるもの也」(『続未曾有記』)と記しています。瀬戸の染飯は、前年刊行の十返舎一九『東海道中膝栗毛』三編上にも登場し、東海道の名物として知られていました。

くちなしは初夏に濃厚で甘やかな香気を漂わせる白い花を咲かせますが、古い

時代の中国の詩人や日本の歌人にはあまり興味惹かれるものではなかったようです。晩秋につける赤味のある黄色の実は、漢方では消炎、黄疽、打撲捻挫などに効能があるとされました。また染料や着色料として用いられ、やや赤味を帯びた濃い黄色に染め上げられました。染織家の志村ふくみさんは、他の染料のように媒

万治三年(一六六〇)頃刊行の浅井了

意『東海道名所記』には、小判ほどの大ききで、強飯にくちなしを塗ったうすいものと書かれています。美味というほどのものではなかったようで、寛保元年(一七四一)、東海道を旅した松平秀雲は、味わいはないものの、作り方が雅と書き留めました(『吾妻の道芝』)。また土屋斐子は、『旅の命毛』(文化四年(一八〇七))

です。石野家では明治二十年(一八八七)

二月に没した甚蔵(俳号は鶯後)の代で染飯業をやめ、俳句仲間で元田中藩士の増田近山(染井堂・染井軒)が一時代わって営業したといい、明治二十五年六月に没した後、戦国時代以来、形を変えながら続いた染飯は廃れてしまったものとみられます。(専門委員長 湯之上隆)



画狂人北斎画「藤枝」(瀬戸染飯店先の図)・文化頃(藤枝市郷土博物館蔵)

藤枝の文化財保護活動のあゆみ

その二——郷土の歴史は藤枝市民の宝物——

藤枝市文化財保護審議会委員
元藤枝市史編さん委員
天野 信直



占領軍は国内の何れのものにも勝る、絶大な力をもって臨んだ。静岡のGHQ（連合国軍最高司令官総司令部）から視察に来る下級将校の前では、町長、署長も頭が上がらなかった。文化活動としても同じことで、占領軍の趣旨に逆らったら許可にはならなかった。戦中の生活のしきたりから、民主主義に改める社会教育講演会、講習会がどの地区でも始まった。「ナトコ」と言うGHQの映写機が貸し出されフィルムライブラリーが県に出来た。新憲法が昭和二十二年（一九四七）五月三日に発令されたが、その後の五年間は実質上ポツダム政令が国内の政治・教育を睥睨（へいぎ）していた。昭和二十三年（一九四八）教育委員会の委員の公選制が成立した。（同三十一年（一九五六）に首長による任命制になった。）GHQは明治以来の日本の大改造、世の中の仕組みを変えるのが目的であった。昭和二十五年（一九五〇）朝鮮戦争が勃発した。同二十六年（一九五二）対日講和条約に調印、翌年の二十七年（一九五二）十一月に長かったポツダム政令が廃止された。終戦より数え六年目であった。ある程度の自由を取り戻した日本は、国の政治、外交、教育等が活発になった。

昭和二十九年（一九五四）三月、現藤枝市を形成する周辺の二町（青島・藤枝）四か村（葉梨・大洲・高洲・稲葉）の町村合併による新藤枝市が誕生した。次いで瀬戸谷村、広幡村も合併に加わった。

町村合併は各村の事情もあり紆余曲折した。強

烈な青島地区の反対集団が^{むしづな}箴旗を立てて勝草橋を行進して来た。百姓一揆の箴旗は聞いたこともあるが、反対スローガンを大書した箴旗には圧倒させられた。それまでは、各町村の教育委員会には少ない社会教育事務担当者が、主に青年団、婦人団体、自主文化団体の支援を図っていた。各種の学習グループが続々と結成された。志太地区に登録した文化団体は三十九団体にもなった。

昭和二十八年（一九五三）、法律第二十一号により青年学級が各地区に設置された。同時に文部省は「青年学級指導要領」を出した。青年団と学級の意見の対立が起きた。古いしきたりから立ち上がりがたいという青年達の願いが結集した。瀬戸谷地区は全国農村青年演劇コンクールに入賞した。各地区に「古里の歴史研究グループ」が出来始めた。郷里の歴史に興味が出てきたのは、多少生活にゆとりが出来た証拠であろう。昭和前期の市民の生活を振り返ってみると、戦後五、六年は未だ暗中模索の状態であった。その世情の一端を書き留めておこう。

市中の物価は野放し状態であった。しかし円に不安感不思議と少なかった。それを陵駕するかのように、物々交換が大手を振った。「かつぎ屋さん」は志太の塩、乾燥芋、古着を持って東北地方へ出向き米と物々交換して来た。町場に生活する者にとって、食料の調達には買出し屋さんが大いに頼りになった。食糧難は米一升、塩一升を得るために情けない思いをした。藤枝発で相良方面へ向かう軽便鉄道の客車、貨車には、かつぎ屋さん、買出しの人が鈴

なりになって榛原方面に向かった。まさに命懸けだった。この大奮闘をした軽便鉄道の機関車は、多くのエピソードを秘めて郷土博物館の裏に保存されている。見るたびに当時のすさまじい、あの光景が甦（よみがえ）って来る。当時の証をする貴重な存在である。

郷土博物館発行の「戦時中のくらし」「軽便鉄道」、市の広報課の編集したVTRなどで五十九年前の藤枝の様子を見て欲しい。

当時簡単には手に入らなかった、コダック社のハミリシネマで、時田接骨院長（藤枝市岡出山）が駿遠線の貴重な記録を残してくれた。我々はデンスケの愛称があった携帯録音機が欲しかった。当時は何十万円もする高価なもので高嶺の花だった。四苦八苦して秋葉原のジャンク屋から部品をかき集めて、不格好な肩掛けの携帯録音機を作り録音した。今に残る軽便最終列車のお別れ式典の模様がそれである。テープは紙製で一卷十五分の録音が精々であった。山口市長が訝（いぶ）しそうに見ていた。この録音機はその後瀬戸谷地区ほか、各地区に出向いて、「市長と語ろう」「田遊び」「高根神社の神楽」等の録音に活躍した。

地域にある文化財の処置は、個々の手で保護を任されていた。未熟ではあったが藤枝郷土歴史研究会の会員達は良く勉強していて実績をあげた。

一例をあげると、市内中ノ合（葉梨）の^{かんけいじ}湊溪寺の開基の位牌が依田^{よだのぶしげ}信蕃、弟信幸のものであると、立科町の土屋家の古文書から解明した。信蕃は三枝虎吉と共に田中城の最後の守将であった。虎吉の開山の三星院を訪ね歩いた。須玉で子の昌吉一族の大宝篋^{ほうきやういんとく}印塔を計測した。その子、守昌が田中城代で一万石でいたこと、また守昌の逆修塔の碑文解説をした。

昭和三十一年（一九五六）上田市の知人飯塚氏から、微かな記憶で本多忠晴の文書を市の博物館で見たことがあると教えてくれた。後日、郷土歴史研究会の八木（藤

「枝」をはじめ五人は向島（教委）と共に館長の特
別な取り計らいで、遂に本多忠晴の「田中在城覚」
を見つけた。藤枝市の文化財に指定されている

「田中城絵図」もその時に見つけたものである。
足で稼いだ文化財の発掘である。大手の源昌寺の
開基は初代田中城主の酒井忠利の父正親の菩提の
為に慶長十四年（一六〇九）九月に建てた寺であ

る。のち子孫は代々小浜の城主で幕末までいた。

小浜に藤枝の何かがあると、八木務（藤枝）、大
石甲次（青木）、福井金苗（葉梨）、小花藤平（西
益津）、石川静雄（高洲）、徳山秀宝（教委）達は
出かけた。まだ自治体の多くは市史までは手が届
かない時で、文庫も雑然としていた。そこで発見
したのが「藤枝宿の記」、「若狭拾遺」、小浜藩の

「介錯秘伝書」等である。「若狭拾遺」は後に福井
県の重要文化財の指定を受けた。「介錯秘伝書」
は全国読書新聞のコラム第一号に掲載された。三
島由紀夫が六部至急送れと、掲載した信濃史学会
へ重ねて申し込んできた。その後数か月してあの
事件が起きた。

百年保存事業は一年で予算が打ちきりになって
中断したが、高根神社の氏子中の熱意で保存庫が
大杉の下に建てられた。今も健在である。

郷土歴史研究会は文化財の保護条例の成立を教
委に再三陳情した。国は昭和二十五年（一九五〇）
五月に文化財保護法を施行した。現在まで法は九
回改定されていて各章の内容も仔細に提示されて
いる。我々が市に陳情した文化財の保護の主目的
は、年を経るに従って数を増す物件に、乏しい知
識では追いつけない時代が急速に迫っており、藤
枝市の文化財は藤枝市民にとっては掛け替えのな
い重要なもので、国の文化財の保護とは立場が異
なるが、郷土にとっては同等に貴重な存在である

というのが趣旨であった。昭和三十一年（一九五六）
三月、地方の歴史資料館の設立を、文化会会報を通
じて市民に訴えた。

市教育委員会は旧西高前の志太教育事務所の二階
にあった。藤枝市の文化財保護審議会の条例が採決
された。起草したのは深田三次課長が苦心して書か
れた。

昭和三十一年（一九五六）九月、文化財保護審議
委員会が成立した。初代会長は丸杉作兵衛（藤枝）
で委員は小川博（藤枝）、岡村六治（葉梨）、鈴木祖
光（稲葉）、増田鉄三（青島）、内藤正治（大洲）、
小花藤平（西益津）、大房暁（学校）、天野信直（藤
枝）、阿井界一（事務局）で発足した。

初年度の予算は、社会教育振興のための執行計画
の名目で七万円であった。当初の市指定文化財は、
現在指定されている文化財の中に包含されている。

市制が施行されるや、文化財保護の事業は野放し
状態から、組織だつて行動するものになった。アマ
チュアの技術では処理できない、専門家を必要とす
る高度なものとなった。特に住宅公団藤枝団地（駿
河台）の造成には五年の調査をかける大事業であつ
た。昭和五十一年（一九七六）四月、藤枝市に初め
て専門調査官が就任した。八木勝行（現藤枝市郷土
博物館長）、鈴木隆夫（現葉梨公民館長、磯部武男
（現藤枝市郷土博物館主幹兼市史編さん係長）の諸
氏が市の文化財保護事業に新風を吹き込んだ。

その後、新南新屋に調査事務所が仮設され、発掘
された夥しい土器などの修復する出土品が山積みにな
った。

特筆されるのが志太郡衙跡の発見である。八木、
鈴木、磯部は興奮した。参観の我々委員も「大領」
「少領」の墨書土器を目の前にして、身震いするほ
ど驚き感激した。郷土博物館が昭和六十二年（一九

八七）に完成した。民間の要望は三十五年を過ぎて実つ
た。

博物館に展示してある数々の出土品などは、過去に学
芸員が汗と土にまみれて仕上げた、実績そのものである。
また市の無形文化財、史跡保存事業の進歩は彼らの新知
識の披瀝と受け止めて、惜しみない賛辞を呈したい。
我々は公的事业の有利な面を強く認識させられた。初期
の各地区郷土史研究会の働きは、市民の歴史保護の先駆
けとなった貴い奉仕であつたと確信している。

現在の市民の郷土研究グループは、公的な文化財保護
事業をただ傍観しているような状態である。されど郷土
の歴史は、過去現在を問わず住民の生活に根差した、生
身の歴史であり市民のものである。文化財を保護する願
望は公私ともに一体になって、住民のなかに存在するも
のである。

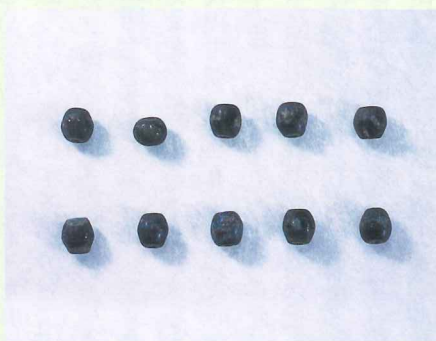
最後に五十余年の間に同志であつた方も多く故人にな
った。謹んで業績を偲んで追悼の意を表する。（敬称略）



昭和21年6月 片浜駅付近を走る軽便（河原千次氏提供）

若王子21号墳の蜻蛉玉

考古担当調査委員 菊池 吉修



エジプトで出現したと言われています。その後、世界各地に広まり、日本には弥生時代に伝わっているようです。蜻蛉玉は藤枝市でも見つかっています。なかでも注目できるのは、若王子二十一号墳から出土した蜻蛉玉です。その理由は、一つの古墳

古墳時代の後期になると、多くの古墳がつくられるようになります。藤枝市でも六世紀から七世紀にかけて、非常に多くの古墳がつくられ、その数は、千基以上に達していたようです。これらの古墳はある程度のまとまりをもつてつくられ、群をなします。そのため、群集墳とも呼ばれます。古墳には葬られた人の力に応じて、様々なものが一緒に入れられました。もともと多くの古墳から出土するのは土器ですが、中には、金ピカの馬具、刀や弓矢などの武器が納められた古墳もあります。また、耳飾りや玉類などのアクセサリーも多く出土する遺物の一つです。玉の中には琥珀（こへき）でも、ものや、瑪瑙（めのう）、水晶、ガラスでできたものがあり、形も勾玉（まがたま）や管玉、丸玉などバラエティーに富んでいます。このような多種多様な玉の一つに「蜻蛉玉」と呼ばれる玉があります。「蜻蛉玉」は「とんぼだま」と読みます。言葉だけをみても、どのようなものであるのか、なかなかわかりにくいと思います。蜻蛉玉とは、ガラスでできた玉ですが、一般的なガラス玉が単色であるのに対し、複数の色が組み合わされているところに特徴があります。蜻蛉玉は古く、紀元前十五世紀の

から十個もの蜻蛉玉が出土したことあります。県内のみならず、広く東海地方全体を見渡しても、一つの古墳から十個もの蜻蛉玉が出土した古墳はこの古墳くらいでしょう。

若王子二十一号墳の蜻蛉玉は、紺色のガラスが地となり、それに緑色のガラスが二〜三か所についています。これは「斑点文蜻蛉玉」とよばれるタイプです。蜻蛉玉の中には外国で造られ、日本に輸入されたものもありますが、若王子二十一号墳出土の蜻蛉玉はおそらく日本国内で生産されたものでしょう。さて、若王子二十一号墳は六世紀後半に築造された古墳です。古墳からは蜻蛉玉の他に、大刀や土器が出土しています。十個の蜻蛉玉は六世紀に生きた若王子二十一号墳被葬者の身体を飾り立てていたことが想像できます。ここに葬られた人は比較的有力な人物であったと考えられますが、古墳自体の大きさや副葬品の内容からは平野全城を支配していた人物ではないようです。どのような経緯で、このように多くの蜻蛉玉を持っていたのかはわかりませんが、たやすく地元で生産できるものではないので、畿内等の他の地域との交流によって、蜻蛉玉を手に入れたと考えられます。

若王子古墳群は蓮華寺池の西に控える丘陵の頂上に近い所にある古墳です。この古墳群からは志太平洋野を一望できます。若王子古墳群は蜻蛉玉を出土した二十一号墳を含めて、三十三基の古墳の存在が確認されています。ここであげた二十一号墳は古墳時代後期に造られた古墳ですが、若王子古墳群の中には古墳時代前期〜中期に造られた古墳も多くあります。現在、古墳は整備され、墳丘が残されています。小山のように盛り上がった墳丘が幾重にも連なり、現在でも往時の姿をうかがうことができます。

瓦 かわらばん 版

より深く より楽しく

わが街「藤枝」を学びましょう

執筆委員紹介

「近世担当」として新たにお迎えしました。

◎田中藩の文化について◎

特任専門委員 岩崎 鐵志 平成15年6月

◎田中城について◎

特別調査委員 宮崎 勝美 平成15年8月

(静岡県文化芸術大学教授)
(東京大学史料編纂所教授)

発売中

『藤枝市史』

・別編・民俗(四、〇〇〇円)

・資料編2 古代・中世(三、五〇〇円)

『藤枝市史研究』第1号〜4号

『藤枝市史叢書』(2・4・7)

近日刊行予定

『藤枝市史研究第5号』

・近世後期に駿遠地方における地域金融

・藤枝地域の満州開拓民

・庄屋引渡諸帳面目録帳

・滝沢区有文書を伝えたもの

・青山八幡宮浅井家所蔵「慶應四年五月 万控」

・吉田家神職支配と青山八幡宮社家の動向

・藤枝市防空監視哨と県下の空襲

『藤枝市史叢書8』

約百年前の小学生の日記を復刻しました。

当時の生活が手に取るように早わかり!

◎販売についてのお問い合わせ◎

藤枝市郷土博物館 市史編さん係

TEL 054-645-1100